

特別講演

ときめいて！輝いて！！

川辺町農業婦人クラブ 横田 喜子

・・・迷ったときはやる方を取るチャレンジ精神・・・

皆さんこんにちは、ただいま紹介をいただいた岐阜県川辺町の横田と申します。よろしくお願ひします。

私はふだん、シイタケ専門ですので山の中で原木を相手に、シイタケを採ったりして、泥まみれになって働いています。このように人様の前でお話する機会はあまりありません。ですから頼まれた時に迷うんです。迷ったときには自分の生き方としてとにかくやる方を取るんだと心掛けてきましたので、ふだんは農家の奥さんたちとかPTAとか婦人会の方たちにお話を頼まれますけど、今日みたいに、大勢の方の前でお話することは怖い感じがしますが、とにかくチャレンジ、本当に慣れないことですので宜しくお願いします。

はじめに私の家族を紹介させていただきます。夫の父親で77才のおじいさん、71才のおばあさん、それから一番上は、昨年大学を卒業して大阪に就職している長女と、いま、大学4年生の長男、北海道にいますけど学生結婚しています。卒業式は3月にあるのですが、もうじき孫が生まれます。長男が大学に入ったとき、「もう勉強はいいから素敵な彼女を見つけてきて」と言ったんです。すると、ほかの子供たちが、「うちのお母さんは変わってるね、普通のお母さんだったら、恋なんか後からできるから、しっかり勉強してきなさいというのが当たり前なんだけど、うちのお母さんは勉強はいいから素敵な彼女を探してこい、そんなお母さんも珍しいわね。」と言いました。

3番目が次男です。次男は岐阜農林高校へ行きました。これは農業をやりたくて行ったのではなく、岐阜農林は岐阜県ではバスケットが一番強くて、バスケットをやりたくて行きました。寮生活でした。卒業して1年間会社へ入ったのですが、「いろんな人を見ていると会社はいやだよ、うちのお母さんやお父さん位の年の人達が若い人に叱られて小さくなって、ヘイコラ、ヘイコラしている。うちのお母さんやお父さんを見ていると生き生きして楽しそうにやっているのに、ああいうのを見たら泣けてくる。ああいうのは嫌だし、シイタケは小さい時から手伝っていて、嫌だと思った

けど自分はシイタケをやりたい」と言って去年から家へきて一緒にやっています。1年やりましたけどこのままでは世間が狭すぎていやだし、もっと体験したいということで、今年の6月からアメリカへ農業研修で2年間行くことになっています。

4番目の三男は自分はあまり農業が好きでないし、機械が好きだからと言うことで高校の機械科を卒業して、愛知県に就職して寮に入っていますので家にはいません。

5番目は女の子で高校2年生です。

一番下は男の子で中学2年です。それだけの子どもと、今年はたまたまいないんですが、ここ15年程農業研修生を受け入れていました。最初の10年位は日本国内の研修生でしたが、最近10年位は海外からきています。アメリカから4人と中国・ブラジル・オーストラリアから3ヶ月・半年・1年という単位で研修生を預かっています。子供の育つ頃は11人、12人家族という感じでした。

・・・田舎者という言葉はいい響き・・・

“田舎者”っていう言葉、私にぴったりで、とても好きだなあと思っています。前は嫌だなと思っていましたが、と言いますのも私の両親は、元もとは東京なんです、戦争の時に母の実家がある長野県に疎開していたんです。疎開している間に東京は空襲にあって燃えて帰る所がなくなって、そのまま長野県に住みついてしまったんです。父は中学校の教員になっていましたので長野県、新潟県に近い飯山周辺を転々としていました。長野県の中でも農村でしたから農家の人を見ると、父はあれは田舎者だとか、田舎者の考え方だとか、田舎者言葉だとか、それがすぐでる。それを聞いて私も田舎者って嫌だなという感じで育ってきました。けど今はあれほど嫌だった田舎者って言葉がすごくいい響きで、いいなーと思いますし大好きです。それは、すっかり農村、山村の中で農家の主婦として、自信を持って誇りを持ってやっているからだと思っています。子供時代は農村で育ちましたが、農村の寄り合いとか風習とかお付き合いをしていませんでしたので、外から見ればよそ者と言う感じで、あまり農業のことは知らずに育ちました。どちらかと言うと農家・農業は嫌だなと思い育ちました。父は教員でしたので父が学校から帰って来ると明るくてもすぐ夕飯でした。夕飯を食べてテレビなんかを見ながらごろごろしていると、真っ暗になって夏なら8時から8時過ぎに農家の人達が泥まみれになって帰ってくる。今なら農家の人達は明るいかっこうをして、はつらつとしてよく出かけますが、私が育った頃の農家の奥さん達は一樣に黒っぽい服装をして鍬をかついではおかむりをして、イメージが暗かったなと思っています。農家の人達はこれからご飯の用意をして食べるのかなと思っていました。そういうのを見ていて農業は嫌だなと思っていましたし、農家や農業青年には関心はありませんでした。

そんな私が農業に出会ったのは、今の主人と出会ってからなんです。私は小さいうちから海外に

すごく関心があり海外へ行くことを夢見ていました。丁度私が、長野県の短大を卒業する頃に青年海外協力隊員というのができました。それまでは先進国ばかり興味があったわけですが、こういう制度があるならアフリカなどの海外へ行きたいと希望していました。ユニチカに入社して働きながら海外へいくための勉強をしていたのです。ある日たまたま新聞を見ていたら、新聞の「時の人」欄に今の夫のことが載っていました。どうして載っていたかと言うと農業青年が海外へ勉強に行くというのです。今の時代なら若い人はどんどん勉強でもなんでも海外へ行きますので、新聞に載るようなことではないと思います。20数年前、彼が行った頃は珍しかったので、彼の記事を見たときすごく感動しました。私は農業には無関心でしたがその記事を見たとき、彼の農業に対して自信と誇りを持って進もうとしている姿にすごく感動しました。すぐ返事が来るとは思いませんでしたが、ファンレターみたいに「とにかく頑張ってください」と手紙を書きました。そうしたら、すぐ折り返し返事がきました。1週間後に日本を立つ計画だったのです。「何月何日の何時の列車で岐阜駅を立つから、見送りに来て下さい」とは書いてありませんでしたが列車の名前が書いてあって、「気兼ねする人は誰もいませんから」と書いてありました。会社を休んでまで行こうか、行かまいかとさんざん迷いましたが、彼が岐阜駅で手紙をくれた人が来ているかなと探すと悪いと思ってとにかく行きました。その時に、手ぶらでは行けないし、いろいろと考えました。1回の文通だけでは餞別を渡す程の仲ではないし、さんざん迷ったあげく素敵な花束を贈ることにしました。このようなことで、花束を持って岐阜駅へ行きました。私は彼の顔は新聞でみているからわかっていたのですが、その時の私の第一印象はどうだったかと後から主人に聞いてみました。すると「でかいなと思っただけだった」と言うのです。私は結婚する前も6人の子供を産んだ今も痩せも太りもしないし、昔から大きかったのです。私の彼を見た印象は、ただ「むさくるしい」と思っただけでした。髭はぼうぼうと生えて痩せこけていたからです。というのも彼はアメリカへ行く前に「自分の家族の生活の基盤を作って行きたい」ということで、彼は25才でしたが、5人兄弟の長男だから自分がいない2年間のために基盤づくりを相当やっていたらしいのです。アメリカへ行く頃には痩せこけていました。彼に花束を渡したら本当に大事そうに抱きかかえたのです。その列車に乗ってからもすぐ網棚に載せるのではなくずっと抱きかかえていたのです。東京へ着いたらすぐにハガキがきたのです。「ホテルへ着いて花束のいい匂いがする」と書いてあったのです。アメリカへ着いたら「着いた」という手紙がきました。私も出しました。出せば来る。来れば出すと言うことで2年間に手紙は200通を越えました。行くときに知りあっただけだからラブレターでもない。彼の書いて来ることは「農業は何と素晴らしいか」とそればかり、「自然を相手に育てる喜びとか農業は華々しくはないけれど最も人間らしい生き方だ」と、どんどん書いて送ってきたわけです。私が彼に出した手紙は、日本の情報を知らせてやろうと、ただそれだけでした。その頃は、日本がどんどん経済成長している時でしたから、2年間も外国にいて情報とかお金の価値

とかという面で、浦島太郎みたいになるのではないかとあって、日本の情報として新聞や雑誌を送ったりなど、どんどん彼に知らせてやりました。2年目から次第にラブレターに変わっていきました。だいたいそのようなやりとりでした。

・・・希望に溢れて農業青年に嫁ぐ・・・

彼から来る手紙を見ていて私の気持ちもだんだんと変わってきました。「農業なんか」と思っていたのですが、「農業もいいんだな」と思いかけて最後には、「農業こそ」と意識も変わってきました。そして彼がアメリカから帰ってきてすぐ結婚しました。

私の親は大反対だったんです。農業は大変だし、あれだけ働いて苦しい仕事だからお前にできないということに反対だったんです。ところが、彼がアメリカから帰って来た時に、岐阜県の自分の家に帰る前に、長野県の私の家へ行ったんです。岐阜県の方でも、両親や兄弟が待っていたんですけど、先に長野県の私の親・兄弟に会いに行ってくれたんです。そうしたら、あの反対していた親が、「あの青年なら何をやってもいい」と言ってくれたんです。私がない時に彼1人で親・兄弟に会いにいったんですね。一晩泊まって話してきて、親も「あの青年なら素晴らしい」ということで、OKになり話はとんとん拍子に進み結婚しました。私もあれだけ嫌だった農業が、「自分なるからには農家の主婦として働くだけで終わりにたくない。明るくてもっと生き生き楽しんで農業をやりたい。」そういう希望に溢れて結婚したわけです。そんな希望を持っていたんですが、いざ結婚してみると本当に大変でした。彼が5人兄弟の長男で、妹、弟たちは全部家にいましたし、80才を越える大ばあさんがいて、両親はまだ母は46才と、今の私より若かったです。最初の家族の紹介の時忘れていましたね。夫は51才です。私は48才です。だから今の私よりも2才も若い母と夫の兄弟が全部家にいるんですから考えてみたら大変なものでした。そのうえ夫は結婚して1年間は研修生としてハム会社へ行きました。愛知県稲沢市にある三井ハムへ研修に行きました。研修生だから、誰よりも早く行くということで、家を朝の5時に出て行き、帰りは会社が済んだ後に、社長さんや他の人からいろいろと情報を聞き出したいとのことで、帰りは10時なんです。私は夫だけが頼りでこの田舎へお嫁にきたのに、頼みの夫は朝の5時から夜の10時まで家にいない。しかも両親と大勢の兄弟の中で慣れない農業をやらなければならない。あの頃が一番辛い頃で、自分の夢もあったものではない。夢が膨らんでゆくのではなくしぼんでいってしまいました。生活は、暗い土間のお勝手で火を焚いてご飯からお風呂から何もかも私の仕事です。おまけに、今は上水道があるから水に不自由しないんですが、あの頃私の部落の周辺は水がないことで有名だったんです。水が十分あると言うのは6月の梅雨期頃だけで、夏と冬は給水車が来て水を配ってくれるんです。渇水期になると各テレビ局が放送するんですね。それくらい水がなくて有名な所でした。私も子供が沢山いましたから、何度かテレビに出たことがあるんですが、子供が6人も

いますから年から年中、産前産後ということでお腹が大きいわけです。あるテレビ局が取材に来たときに、「ああ奥さんモデルになって」と言って「お腹の大きい人でもお風呂の水を汲んでいます」という所をテレビに撮られました。それが初めての取材だったわけですが、それほど水の無いところでした。

農家の生活に本当に慣れるのには大変でした。生活の大変なのはまだいいんですが、一番感じたのは、人間関係でした。83才になる大ばあさんは未亡人で1人で子供を育て上げてみえたわけですが、義母がいない時、まだ結婚したばかりの私に義母のことを「私が1人だというのに、何だかんだと意地悪してひどい目にあった。」と私に言われるんです。大ばあさんがいない時は、義母が「うちのばあちゃんは独り者だったので、それはきつかった。私が結婚してからどれだけ子供を連れて在所へ帰ったり、裏山へ行って死のうと思った」くらいのことを言うんです。私は核家族で育っていますので、嫁と姑の仲を知らなかったのです。来てみたら、いろんなことをどンドン聞かされて、一つ屋根の下に20何年も一緒に暮らすのに、こんなことを言い合いながら暮らさなければならぬのかと思いました。

農村の女性の生き方として嫁と姑、そういうものに左右されながら生きて行くのは嫌だと思いました。どうせ一緒に生活するのなら、もっと仲良く、楽しくやっていきたいなと思いました。

私も農家へ嫁いですごく苦しく辛いなと思いましたが、私達の年代よりも一つ前の人達は想像を絶するくらいだったと思います。戦争を体験されていますし、ただ貧しさの中、ただ働くだけで終わってこられたと思います。しかも、お姑さんは、私が出かけると言う「私は、どこも行かないわ」と強調して言うんです。今は本当にあちこち行かれますけど、義母の嫁の時代はただただ働くだけで大変だったらしいんです。

経済はどんどん成長して農村も田舎も変わりないくらい成長しました。昔は一目瞭然、都会の人か田舎の人かすぐわかったのですが、今ではわからないくらい経済的には成長しています。しかし意識の面ではどうかと言うと、旧態依然ということを実感しました。経済的には豊かになっているのですが、男性も女性も意識面が伴っていない。昔のままだとすごく感じました。私ももっと明るく楽しくやりたいと思っていましたから、だんだんその夢がしぼんでいってしまって、このままでしたら自分の生き方も何もあったものじゃないから、農村でこのまま終わってしまうのは、つくづく嫌だなと思いました。何か機会があったら、ここを飛びださなければならないと思っていました。前も後ろも山で、飛び出すなら今だと思ったこともありますが、彼と結婚した原点に戻ってみれば、農家に嫁いで来た訳でなくて彼と結婚したわけだから、ここを逃げだすのではなく、ここに根を張って行こうと思いを新たにしました。

・・・シイタケ栽培との出会い・・・

結婚した当時、家は自家用の田畑と1500羽の養鶏で生計を立てていました。養鶏を始めたのは、彼が高校生の頃に、自分で鶏を5羽から150羽まで増やしたことがきっかけらしいのです。150羽くらいの時に、当時の高校の先生に聞いてみたら、自分の養鶏で稼ぐ方が先生の給料より多かったと言うんですね。それくらい養鶏の方が儲かったと言うんです。自分で鶏を飼いながら妹や弟を学校に出させて儲かって面白くて仕方がなかった。学校を卒業して3000羽まで増やしました。「どうせやるなら、もっと、もっと、鶏を増やしたい、アメリカへ行けば本場の養鶏場を見たり、自分ももっとやりたいから、勉強してください」ということで彼は研修生として、アメリカへ養鶏を勉強するために行ったんですが、アメリカへ着いてすぐに彼は諦めたんです。どうしてかと言うと、カリフォルニアの養鶏場へ行ったら、日本なら何千羽と言う時代に、何百万羽という、ものすごい養鶏場をまの当たりにしたからです。しかも彼は生き物が好きで飼っているわけです。それなのに、アメリカへ行ったら、鶏を生き物として扱っていない。卵をとる道具としか見ていない。一羽一羽ゲージに入れて卵をとる。そういうのを見たら嫌になって、鶏はもうやめようと思ったらしいです。こんな山の中では、どう考えてみても太刀打ちできないからと鶏をやめたんです。それでは、鶏をやめて何に目を付けたかと言うと七面鳥なんです。アメリカへ着いて直ぐにセスナ機で、空から見せてもらった時に、山の中でバタバタ動いているものが沢山いる。あれは何かと聞いたら七面鳥だったんです。七面鳥なら山に柵を作っておいて放し飼いにして自由に飼えるから、ゲージに入れるよりもっと生き物らしく飼える。それに日本の国土の60%か70%が山ですから、これからの農業はいかに山を利用していかだと考えたわけです。その結果、七面鳥に目を付けてアメリカで2年間勉強してきました。日本へ帰って来て、七面鳥の勉強してきたものの、何をしようか考えたわけです。彼と結婚する時、彼は無職・無収入、これから何をすることもわからない状態だったのです。そのため、私の親も余計反対したわけですが、彼は職業も収入も無かったんですが、「この人なら何かきつとやってくれる」と思っていましたので、何も無いということは、苦になりませんでした。むしろ、2人でゼロから始めるということが理想だったんです。そして、アメリカで七面鳥の勉強をしてきたんだから、日本に七面鳥を広めようとパイオニア精神で始めたんです。いきなり七面鳥を飼っても、日本では馴染みがないのです。クリスマスでは七面鳥を食べると言いますがどれだけ食べているんでしょうね。私たちも食べたことはありません。七面鳥の肉をどんどん売するためには、七面鳥の肉を加工して1年中売る必要がありました。そこで七面鳥を飼う前に食肉加工の勉強が必要だということで前に話しましたハム会社へ行ったわけです。稲沢のハム会社に通いながら、家の山をどんどん伐っていったわけです。彼1人ではなくて両親、私も伐って枝を運びながら、七面鳥に夢をかけていました。1年間ハム会社に通って、山も伐っていき七面鳥を飼い始めるといった時に、日本にたった1ヶ所だけ兵庫県に七面鳥を飼っていたところ

があったのですが、これが倒産したのです。家に入る予定の雛が入らなくなったんです。もう彼は3年間も七面鳥に夢をかけて、気遣いのように頑張ってきておりました。いざ飼おうとした時には、私達には子供が1人いましたから、途方に暮れてしまいました。両親はただ「勤めに行けばいい」「農業はやめればいい」「山あいの地で田んぼや畑が多くあるわけじゃないし、ここでは勤めに行けばいい」と言われたのです。勤めにいけば可児市とか美濃加茂市にはいくらでも勤め口があり、それもあって隣近所の人は皆、勤めに出ています。農家は百何軒かあっても専業農家は内一軒だけです。そんな所ですから勤め口はあったわけですが、彼は農業が好きでたまらないわけです。勤めるのではなく、農業をやっていくんだということで私も彼の夢に賭けていますので、彼がやるのなら、とにかく一緒にやろうとしたわけです。農業でこれから何をやっていこうと考え、たまたま2人で山へ行った時に、七面鳥を飼うために伐り開いた山に、たまたま足元に転がっていたのが、シタケの原木だったわけです。これをたまたま拾い上げて、それこそ「溺れた者藁をも摺む」ではないのですが、七面鳥の夢は捨てたわけではないけれど、とにかくシタケをやってみようと思ったわけです。これが現在のシタケ栽培の始まりでした。結婚して2年目でした。

新婚旅行から帰ってきたときに、夫が両親の前でお願いしてくれたことが二つあります。一つは子供は沢山欲しいということでした。私達には6人子供がいますが、最初から子供はできるだけ沢山という方針でした。特に山へ行っているような仕事をしていると、こんな自然環境の中で子供を伸び伸びと育てたいと言う夢が益々膨らんできました。自分は健康には自信がありますし、スポーツもやっていますので体力にも自信がありました。その夢を両親の前で話しました。そのころは子供は1人か2人、3人目なんか恥ずかしいと言う時代でした。私達は恥ずかしいことも何もない。若い2人がそのつもりでいるのなら、両親もできるだけ応援するから、義母の若いうちにしてくれと言われました。だから言われたとおりに、5人までは1年半おきに、上が1才半になると次が産まれるという具合だったので私よりも、両親が大変だったのではないかと思います。5人まで産んだときに、さすがの私も疲れ果てました。シタケも拡大して無我夢中でやっていますし、自分も年から年中産前産後という感じでしたから、お腹が大きくても下刈りとか、トラックに乗ってどんどんやっていました。5人目で、「さすがに疲れてもう駄目だわ」と思って諦めました。1番下の子が2才位になってくると、主人が片手では足りないと言いだして、そんな嫌がる私を、彼は、「とにかく両親が若いうちに生まれる子供はわがままだったりして、若い時に生まれる子供よりも2人とも30才を越えてくると、社会的にも認められて精神的にも落ちついて、ゆとりができてきて、こういう時こそ素晴らしい子供が産まれるんだ」と説得するのです。私もそう言われればそうかなと思って体もまだ元気でしたし、だんだんその気になってきて3年おいて6人目が産まれました。このように子供はできるだけ沢山ということが一つでした。

それと、もう一つお願いしてくれたことは、「これからは農家のお嫁さんといっても労働力をも

らったなと思わないでくれ。これまでは農家へお嫁にきたら手間が増えたとばかりに喜ばれ、農家へ行ったお嫁さんは一生懸命働いて良いお嫁さんだった。いくらお嫁さんでも働け働けではいけないのだ、労働力をもらったなどと思わないでくれ。僕は喜子に農家のお嫁さんでも能力があればどんどん伸ばしたり、僕はそのつもりでやって行くから頼む」と言ってくれたのです。私はそんなことを言っていると頼んだわけではないのでびっくりして、ますます惚れ直したくらいです。その時お願いしてあるから、私がいろいろ会合に出て行ったり講習会に出て行くときに、義母は喜んで行っらっしゃいとは言いませんでしたが、嫌なことも言わずに子供をみてくださったり、大変ありがたかったと思っています。義母にしてみれば、お嫁さんが出て行くことは面白くなかったことだと思います。夫が最初をお願いしてあるものだから、おばあちゃん（義母）がいてすごくありがたかったと思っています。

・・・もっといい方法はないか・・・

シイタケを始めたときに、普通なら5千本やっていたらまあまあのシイタケ農家だったわけですが、私達は何も知らないために、いきなり1万本から始めました。1万本やればどれだけ大変なのかも知らずに1万本の原木を用意し、やっていたのですがとにかく大変なのです。ドリルを使っているうちに、夫は白ろう病にかかってしまって箸も持てないくらいになってしまいました。そのために、「これはなんとかしなくては」と言う思いが強くなっていきました。なまじっか知っているより全く知らないがために、研究心とかあるいは「なんとかしなくては」というエネルギーが余計でてくるのが分かったのです。知っている人は「今までのやり方でいいのだ」とその気も起こさずにこれまで行ってきたことを黙々とやるのですが、知らないがために、「もっといい方法はないか」という思いが強くなり、家の近くのシイタケ産地や三重県、九州、岩手県などシイタケの産地と言われる所はほとんど見学に行きました。どこもやっていないことを家では取り入れてきました。それまではシイタケの原木を運ぶ時、1本1本動かして一輪車で運ぶところを、百本単位で運ぶ、そういう所に目を付けてはどんどん機械化していきました。「2人で勤めに行かずにシイタケをやる」と決めた時に、私達は「10年後には2人で勤めに行ったときよりも収入をあげるのだ」と、10年後を目標においたのです。それだけの収入を得ることを目標にして働いてきたわけです。実際10年目には、シイタケはそれまでは季節のものだったわけですが、いろいろハウスの構造など考えて1年中シイタケが採れる発生システムが軌道に乗ったわけです。それによって年間のシイタケ出荷量は若干乾燥もありますが大半が生シイタケで、10年目には年間35トン出荷、原木数が10万本、収入が3千万から4千万と企業経営として軌道に乗ったわけです。その時に、夫は給料制ということを考えました。今でも農家のお嫁さんで自分のお金は全然無いという人があります。生活費の中から何処へ出かけるにも、物を買うにも不自由しながらやってみえます。自分

の給料として自由に使えるお金として帳面上は税金対策などであるのでしょうか、夫から手渡して貰えるという人は少ないと思います。うちの夫は、10年目に軌道に乗ったとき給料制にしました。私が給料を頂戴頂戴とせつついたわけではないのです。「家族労働がタダだと思っているようでは経営者ではない」と言うのです。「自分の親や奥さんをタダだと思っているようでは経営者と言えないから、自分は親や妻に給料を出すことを夢見ていたのだ」と言うわけです。私は子供がいますから丸一日朝から晩までシイタケにかかって働けるわけではありません。農家のお嫁さんはどうしても外へ行って働かないと家の中では働いていないみたいに見られるのです。家事をやったり洗濯したり掃除をやったり、外で働いている人に比べれば仕事じゃないみたいに見られるのです。内は家事労働、炊事、洗濯、子供の面倒をみることなどは一家がやっていく上で大事な仕事のひとつなのだから、外で働いている人と全く同じであって、給料は同じだということで私も1人前に給料を貰っています。

シイタケ経営が軌道に乗り、経済が確立できた上で自分を振り返ってみると、それまで、ただ働いてきたただけだな、という思いを強く感じました。最初から働くだけで終わりにたくないという気持ちがありましたので、自分が忙しい中で子供がたくさんいて、それでも何かできることがないかと考えた時に、できることは「読むこと」と「書くこと」ということを強く意識しました。外へ出ていなくても自分の気持ち次第で、時間をうまく見つけ出して本を読む、新聞を読む、読んだら自分も書いてみる。子供を育てている時は、子供の成長記録でいいし、たまに新聞やら何やら見ながら「これはおかしいな、これはとにかく何処かへ訴えて問題にしなければならぬな」と思う時は、どんどん書いて新聞や雑誌に投稿したんです。それは、誰もが「うんうん」とうなずくことでなくとも、批判を受けたり、「それは違う」と言って貰えばそれでいいのであって、とにかく自分の考えはどんどん投稿してきました。投稿することによっていろいろな反響があったわけです。「同じ考えだ」とか「それは違う」とか「文通したい」とかいろいろな手紙が来るようになって、手紙がくれば心を込めて私も返事を書きました。そうこうするうちに文通仲間がどんどん全国に広がって行って、自分の目が外へ向いていったのはすごく良かったなと思っています。

その頃、仲間作りをしたと思ったのですが、私は長野県から岐阜県へきていますので、知っている人が殆どいなかったのです。親兄弟もいなければ、学校時代一緒だった人もいません。近所の若い奥さん方は勤めに行っていますから誰もいませんでした。このような状態の中で、仲間が欲しいなということで、農業新聞に「岐阜県内で農家の奥さんのグループを作りませんか」と呼びかけをしました。岐阜県内から最初6人の反響があって、6人がグループを発足させました。岐阜県の県の花である“レンゲソウ”と言う名前を付けました。県内各地におり、しょっちゅう会えませんからノートを回しましょうということで、回覧ノートのグループということにしました。ノートに自分の思いや何かを書いて次の人に送って行って、1年に1回だけ1泊で集まるのです。いま17

年目になりますが会員24名でずっと続いてやっています。こういう会は岐阜県だけでなく全国にあります。その頃すでに全国大会が3年に1回ずつ行なわれていたんですが、何があってもこれには行かしてもらおうと思って、東京であっても仙台であってもどこであっても全国大会へは行きました。そこへ行くことによって輝いている奥さんもいれば、私が想像もできないほどやり手の奥さんもいれば、大変悩み苦しんでいる奥さんもいれば、そのように全国の農家の人達を知って私も頑張ろうと刺激されたり、しっかり大地に足を付けてやって行こうという意欲が湧いてきました。

・・・子供の教育は体験主義で・・・

子供のことは先程話しましたが、子供をどんどん産んで伸び伸び育てると言っても方針がないのではダメなので、子育ての第1の方針は勉強、勉強じゃなくて“働くこと”だとしました。だから子供が小さいうちから、よちよち歩きになれば、子供は夫がトラックに乗せて山へも連れて行き、おじいさんやおばあさんが田んぼに行くときは子供を二人くらい連れて行ってもらって、これまた連れて行くのではなくて「この子供達に何かをやらせて下さい」と頼むのです。2才でも3才でもバケツを持たして田んぼの石を拾わせたりしました。また、道路ぞいのたんぼですので、空きカンが捨ててあって仕方がないのです。だから、そういう空カンを拾わせたり、「子供をただ連れて行くのではなくて何かをやらせて」とお願いしているんです。子供が小学校くらいになると、おじいさんとおばあさんによく喜ばれたのですが、稲刈りの時期に田んぼへ連れて行くと、おじいさんとおばあさんが稲を「はさ」にかければ、子供たちは田んぼに広がっている稲の束を一輪車で集めて行くわけです。それをやってくれるからすごく楽だということです。一輪車は慣れないとバランスが取れなくて沢山乗せれないですが、子供達の一輪車の扱いは見事なものです。田んぼでは切り株がありでこぼこしていて、本当に一輪車を押しにくいのですが走って持って行くのです。こういうことは頭で考えるのではなくて、何回かやって体で覚えるものだとつくづく思いました。

子供には勉強・勉強というより、勉強も大事ですが内では子供が働くことによって知恵が働く子供になって欲しいと思っています。知識は机のうえで一生懸命勉強してどんだんに詰め込んでいきますけど、知恵が働くかどうか、行動力が伴うかどうか、そういう力はいろんなことを体験してこそ身につくと思うわけです。夫を褒めるのはおかしいですけど、夫をみているとすごいな、といつも感心してしまいます。行動力とか創意工夫していつも考えてやっていく。どうしてこんな田舎の山あいの地に育ってとよく思うのですが、夫は小さいうちからものすごく仕事をしてきたと言うのですね。5人兄弟の長男で小さい頃に母親が体の調子が悪くて小学生のうちから1人前に働いてきたということです。

特に、中学生や高校生になった頃には、農繁期には学校にも行かず働いたと言うのです。ですから、農林高校を卒業する時には、先生は「もう1日休めば卒業できないから学校へよこしてくれ」

と家へ頼みにきてくれたらしいのです。そのあと高校を卒業してからは、東南アジアへ行ってきたとか、アメリカへも2回行ってきたとか、いろんな体験を積み重ねてきて、こういう人になったのだなと思います。それと、これまで研修生として20才から25・26才位までの青年をほとんど毎年預かりますから、ちょっとその青年に何かやってもらえば、頭がよくても仕事ができるか、できないか、すぐ分かります。一時東京からの研修生がきたことがあります。その子は僕は生徒会長をやっていて自分ではすごく頭がいいと言うのです。頭がいいかも知れないけれど、何もしていないから、何もできないのです。例えばシイタケ原木はけっこう重く、その木を持つ時に20才や22・23才の青年が両方のはしを持って持ちあがらないこともあります。これも、足なり腰なり使ってやれば、私たちや子供達でも動かすことはできますが、その青年にはこれができないのです。これは、要領を体験していないからできないのでしょう。それと石を使うことがあるのです。そういう青年に「ちょっとその石を取って」と頼むのです。両手にのるくらいの持てる石なのですが、普通の子なら走ってでも持って来るのですが、この青年は道路を隔てた所の石をころころ転がして持ってきたのです。石の形は悪くて真っすぐいかないから車の通る道路を右、左にと転がりますよね。あれには、笑えて笑えて仕方がなかったと主人が言うのです。このほかにも、障害物を隔ててロープを投げる時に、ちょっと知恵のある子だったらロープの先に石なり木なり何かをくくりつけて投げれば夫の所へ届くものだけれど、長いまま夫の所へ渡そうと思うものだから、何回やっても障害物に引っ掛かって届かないわけなのです。このように、いくら頭が良くても知恵が働かない。学校時代は頭が良くてもいざ社会へ出てみると知恵が働かないとよく聞きますけど、うちの子供達には、成績はまあまあでいいから、とにかく知恵の働く子供になってもらいたいなと思いましたので仕事はどんどんやらせました。子供達がだんだん大きくなって仕事を手伝うのが嫌になると、「明日はテストでだめ」っていいますね。夫は、「勉強は必要がせまれば誰でも真剣にやるんだ。明日のテストはいい点数がとれなくても大した問題ではない。テストよりもこの仕事は今日やらなければだめなんだ。テストはそんなに頑張らなくてもこの仕事をやってくれ」という方針なのです。

子供にすればこれだけ一生懸命働いて、働いただけで終わりかというところじゃないのです。働く時は大いに働いて、夜でもやらなければならない時はやるのです。一方で遊ぶときは大型のレジャーをとる方針なのです。農家の生活はどうしても単調だから、生活の中にリズムを付けて、これで区切りが付いたら大型のレジャーを取って、新たな発想が湧くように1週間なり10日なり家を離れるのです。そして新たな気持ちでやるのです。子供達の夏休みと冬休みにはシイタケをやめるのです。シイタケはやめることができるのです。それは、シイタケの原木を水に浸けなければシイタケは出てこないので調整ができるわけです。これが生き物を飼っている人だったら毎日ですからこういうことはできないと思いますが、シイタケは発生を調節できるから本当にありがたいです。

夏休みにはシイタケをやめて、子供を全部連れて12日間かけて北海道を一周したこともあります。キャンプ道具一式積んで行きましたが、北海道は寒くてキャンプは1日もできませんでしたけど、その時に、子供が北海道を気に入って、長男が北海道の大学へ行きました。あるいは長野県を車で1週間から10日かけてずーと廻ったりしています。スキーは私は長野県出身ですので、今でも好きで子供に負けなくらいの自信はありますが、スキーは4泊5日くらいで一冬に1~2回位行っています。

子供の話のついでなのですが、内の子供達は計画どおりに生まれているのです。最初は女の子がいいなと思ったら女の子が産まれて、今度は男の子がいいなと思ったら3人続けて男の子が産まれたのです。女の子が1人だからもう1人欲しいなと思っていたら、5人目は女の子が産まれたのです。6番目はどちらでも良かったのですが、男の子がいいかなと思っていたら男の子が産まれました。

子供達の成績にはこだわらないのですが、底力だけは付いているなと思います。どの子も明るくてのびのびと大きくなって、良かったなとつくづく思っています。

・・・チャンスは逃がさない・・・

今、私は自分の生き方として、最初に言いましたように、迷った時はやる方を取ることにしています。何事にもチャレンジしてみたい。なんでもかんでも「ああ止めておこう」と思えばすごく楽なのですが、できそうもないことでも「とにかくやってみよう」と真剣に思っただけで50%はできていると思うのです。困難を乗り越えて自分がやりたいと思ったことなら、困難でも、支障でも一つずつ解決してゆけますよね。例えば男の方がゴルフに行くと言えば早起きの苦手な人でも何時に起きてでも行きますよね。自分が好きなこと、本当にやりたいことなら一つずつ克服してできると思うのです。私達がそろって初めてアメリカへ行ったのは結婚して5年目の時でした。5年目ですと経済的にもまだ不安定な状態でしたが3才の長女も一緒に連れて行ったわけです。2才と1才の子供を家に置いて、自分自信は4人目の妊娠3ヶ月だったのです。普通の常識で考えたらとても外国へなど行けるころではなかったのです。その時、私は行けるというチャンスをどうしても逃がしたくなかったのです。それなら、いつ外国へ行けるかと言うと「お金も十分できました」「子供も大きくなって暇もできました」「海外旅行へ行って何日も家を空けられます」という時では「自分自信の気力も衰えました」「あちこち体も痛くなりました」となってしまうと思ったのです。そうではなくて、自分もこれから農村婦人としてやって行くのだという時に、頭も柔軟で感受性の強い今の時に行かなければ駄目なのだとの思いが強かったので、両親にお金もない子供を置いてどうするのかと本当に反対されましたが、1ヶ月かかってお願いして、最終的にはそれだけ言うのなら子供をみてやるから行ってこいということになったのです。

アメリカには20日間おりました。この間、主にアメリカの農家・農村を見て歩いたのですが、日本の農家の奥さんがまだ暗い感じがしている頃でしたので、アメリカの農家の奥さんは何と明るいかと強く印象に残ったのです。これは、私の生き方の上でも大きな意味がありました。

アメリカの農家では、パーティーへ行く時、さっと着替えて旦那さんと腕を組んで出かけて行くとか、また、ある時は旦那さんと奥さんが喧嘩しているくらいに言い合っているんです。あれは、お互いに自分の意見を対等に言い合っていたのです。奥さんも黙っていない。自分の意見を対等に夫に言うんです。

そういうのを見てきて、夫が私に言ったことは「1たす1は2じゃない。やり方によっては3にも4にも5にもなる。だからそういう生き方をして行こう」と言ったのです。それが、今思ってみればこういうことかなと思っています。夫が自分の考え方だけで奥さんに、「今日はあれをしよう。これをしよう。」そういうふうにしていただけでは仕事の能率は2倍位になるかもしれないけれど、やることの範囲は夫1人分です。奥さんの方も対等に知恵を出して旦那さんでは考えも付かないことを出せば、2人分の能力どころか3人分にも4人分にも5人分にもなる。「お前の能力を出してくれ」と言われた時、「私には何の能力もない、弱ったな」と思いました。「力があるくらいだからシイタケの原木でも一生懸命運ぼう」とその時はそう思いました。最初は夫の言うとおりにすることが多かったのです。あれをする、これをする、決まっていたことをやっていました。そのうち、「自分も家族の経営の中で自分だけの持ち分を持ちたいな」と思うようになりました。

・・・アイデアのヒントは情報収集から・・・

何をしようかと考えていた時に、今まで家で全然やっていなかった加工ということに目を付けました。シイタケ屋さんならどこでも生シイタケと乾シイタケはやっていますよね。「あれを食べたかったらあそこのシイタケ屋さんに行かなかったらいいのだ」という位の品物を作ろうと考えました。いろいろ考えているうちに、今やっている加工品として“生シイタケの佃煮”と“生シイタケの粕漬”の2品を作っています。もう販売するようになって10年になりますが、最初は思いきってやってみました。このような新たな製品を考える時何がヒントになるかと言うと、あちこち出かけもしますし、いろいろ感心を持っていますから、これが役に立っています。ある全国大会でのことです。長野県の飯田地方の人でシメジをやっている農家の方がお正月料理にシメジの酒粕であえたものを作りそれが正月料理の一品だと言われたのです。これが一つのヒントになりました。その時、キノコと酒粕と始めて聞いて合うかな、シメジが合うのならシイタケにもきつと合うはずだと思って、家へ帰ってすぐに家のシイタケでいろいろ試作をしてみました。その人と全く同じではなくて、みりんと酒粕と焼酎でやっています。一晩の場合は醤油です。自分なりの商品にするために、味が決まり販売するまでに5年位かかりました。

そういう思いもしないヒントを得るためには、内ばかりで働いているのではなく、出かけるということに意味があります。その日1日の仕事はできませんが、それ以上のことを得るためのアンテナを張っていることが大切だと思います。外へ出て得てきたことは、家の中で還元してゆくのです。今日、ここへ来さして頂いて夫にだけ話すのではなく、子供も、おじいさん、おばあさんも、皆いる時に、「今日はこういう所へ行って、こういう人と出会って」と全部話すのです。本当にいろんな情報を夫に提供することになりますし、心にゆとりができてきます。忙しくても出かけることはそれ以上に得るものがあるなとつくづく思っています。

生シイタケと乾シイタケの加工品ができましたので直接販売をやりたくて手がけました。すぐく宣伝はしないのですが、買った人からまた反響があって注文が来て、市場へ出すのではなく、小売りだけで1千万円を越えるようになりました。役割分担ができたなら、ただ自分の割り当てられた仕事を黙ってこなすのでは面白くないですね。自分の割当のところを更にもっと広めたいとか、ああしたいとか、こうしたいとか夢を持ってやっていたら、夢が広がって行って余計面白くなってきました。

・・・農業を楽しくやっていますよ・・・

農村にはお嫁さん不足で結婚しない男性が大勢います。息子が農業の後継者になったといっても、結婚していないと後継者は続いていかないから後継者はできたとは言えないと思います。やはり農村青年には結婚する相手がいなければならないと思います。

今現役の農村婦人である私達ができることは何かといたら、「ああ農家は嫌だよ、辛いし、苦しいし、仕事は大変だし」と言うのではなくて、「明るくて楽しくて農家の奥さんでもあのように生きられるのならいいな」と若い娘さんが見てくれるような生き方をしてみたいと思っています。そのためには自分が「農業が面白い、面白い」と言っているだけではだめであって、社会的にもっと農業が認められないとだめだと思います。社会的にまだ低いと思うのは、うちの子供が中学生の時に学校から帰って来て、「今日の社会科の授業は嫌だった。クラスの中で農業は内1軒だけなのに、あの先生は農業は貧しいし、苦しい、汚いこんな話ばっか聞いてたら嫌だよ」と言うのです。社会科の先生でも誰でも、農業体験をしてから授業をやってもらいたいなと夫と言うのですが、そのような授業をやっているらしいのです。

あるいは、次男が中学3年生の進路の説明会があった時に、息子が帰って来て「今日は頭に来た、あの先生大嫌いだ」と言うのです。「どうして」と言ったら進路の先生が、進学の話をした時に「勉強も何もやる気のないやつは家で百姓でもやっておれ」と言われたらしいのです。次男のクラスも家で農業をやっているのはたった1人だから、そんな言い方をされると内のお父さんは馬鹿だから農業をやっているということになる。このようなことを言われるようでは社会的にまだ農業が

認められているとはいえないと思うのです。

それと、農家の人自身が言うんですけど、たまたま農家へお嫁さんがきて、「あんな綺麗な人がよく農家へきたね」とか農家の奥さんで何でもできる人がいると、「農家の奥さんにしておくとはいもったいないね」、こう言うことが農家の奥さんの口から出るわけです。これもおかしいなと思っています。農業をやっている人自身が自分の職業の位置付けをもっと高くもっていいのではないかと思います。

たまたま昨年、岐阜県の県庁で農業に熱心な奥さん達が10人ほど集まって意見の交換会があったのです。その時に各地域で熱心にやっている人達だから、いろんな話をしていて皆明るく楽しそうにやっているんだなと思っていたら、最後に、ある1人が「私たちがサラリーマン並の生活がしたいね」とポロリと出たのです。休日の問題とか、お金の問題とかいろいろあるんですけど、これだけやっている人達でもやっぱりサラリーマンの奥さんの生活が羨ましいのかなと思ったのです。

「農家だからあんなことができない、農家だからこんなこともできない」というのではなく、「農業をやっているからこそあれができる、農家だからこそこれもできる」そういうことを数えていったらいくらでもあるんです。時間が自由にある、やり方次第では収入は得られるし、子育てにとっては一番いい環境ですし、自然の中で家族一丸となってやるには最高なんですね。「農業だからあれもできない、これもできないじゃなくて、農業だからこそこれもできる、あれもできる。こういう見方をするといいところが見えてくるよ」と若い人に言っているのですが、農業をやっている人自身の意識が農業は低いのだとひけめを感じている。よそへ出たら自分が農業をやっていることをできるだけ言いたくないって言うのです。知らない人の前では隠しておきたいっていうのです。もっと自信をもってやっていればどんな場へ出ていっても「農業を楽しくやっていますよ」と言えるわけです。私も今日皆さんの前へ出て農業をやっているから恥ずかしいとは思わないし、農業をやっているからこそここでお話ができるのだと思っています。

夫がやる気になるのはどうしてかなと思うと、私たちはほめあってやっているのです。相手を絶対にけなさない。一緒に生活していたら、お互い嫌なこともあるし、目につくこともあるけど、嫌なことを言ってもしかたがない。愚痴をこぼしたり、もう嫌だわと言ってたら夫のやる気もしぼんでいってしまうんですね。「子供は叱るよりほめて育てよ」と言いますね。夫も全く同じだと思うんです。何かで私に対して夫の書いているもの見たら、「男をやる気にさせてくれてありがとう」と新聞にでていたのですね。喜んでいてくれたのかなと思ったのです。それを見た時、「男をやる気にさせて」とはどう言うことだと聞いたら「ほめてくれたことだ」と言うのです。夫が私を見て、おまえはブスで、でかいだけでまにあわんと言われれば本当にやる気をなくしますし、面白くもないですし、夫婦仲もおかしくなります。ああこんなこともできるのか、ほめられると努力もします

よね。だから夫婦の間でも悪いところを言うのではなく、お互いにほめ合っていけばやる気が出るのだなと思いました。奥さんが明るく輝いて生き生きしているかは夫のほうにもかかっていますし、また、旦那さんが社会に出て活躍して生き生きしているかは奥さんの手にもかかっていると思うのです。

そろそろ時間が参りましたので、このあたりでお話を終わらせていただきたいと思いますが、何かひとつでも皆様の参考になる話ができただけであれば、大変幸いなことと思います。どうも、ご静聴ありがとうございました。